

14年 沢ネットのまとめ

沢ネット担当；鈴木勝久

1. 目的

- ・沢山行の交流を行い、技術の向上を図る。
- ・安全な沢山行の実践と普及を行う。

2. 山行計画と実施状況

○ [6月7, 8日 栗子山塊 打ち合わせに間に合わず]

① 7月20日(日) 日帰り 奥多摩；丹波本流 or 谷川・ヒツゴー沢

打ち合わせ；7/9(水) さいたま市サポート活動センター (パルコ9F) 19:30～
→奥多摩；丹波本流 (徒渉訓練)

7名 (太田、井上、水谷、渡邊、日高、近藤、鈴木)

② 8月30日(土) 奥秩父；東沢ホラ貝のゴルジュ

打ち合わせ；8/27(水) さいたま市サポート活動センター (パルコ9F) 19:30～
→奥秩父；鶏冠谷左俣 (登坂訓練、地図読み・ルートファインディング)

台風の影響により転進する。

5名 (井上、太田、高橋、水谷、鈴木)

③ 9月13日(土)～15日(月) 前夜発 越後；佐梨川・大チョーナ沢 or 中ア；中田切川・大荒井沢

打ち合わせ；9/3(水) さいたま市サポート活動センター (パルコ9F) 19:30～
→越後・巻機山周辺；米子沢一奥利根周遊 (泊まり；総合力)

7名 (井上、太田、高橋 (ル)、野田、竹井、中川、鈴木)

④ 10月11日(土)～12日(日) 上信越；長笹川ガラン谷 or 奥美濃；板取川・川浦谷銚子洞

打ち合わせ 10/1(水) さいたま市サポート活動センター (パルコ9F) 19:30～
→諸事情により中止

3. 沢ネットのとりくみについて

① 担当者から、

- ・今回参加者していただいた方々、また、以前参加されて沢ネットに期待していただいていたみなさんにお礼を申し上げます。

- ・さて、沢ネットの目的が達成できたでしょうか。

「沢山行の交流を行い、技術の向上を図る。」

○参加者の力量と期待に対応した山行計画になっていたか。

- ・今年は、はじめに計画を出して集まっていたので、一方的な内容だったと思います。参加者の力量の把握や山行希望を相談する機会が必要でした。

→個人の沢の経験等や山行希望を理解しあえるアンケートを実施してはどうかと思います。

→来年度の山行計画を立てる際に、希望者に集まいただき、相談する機会を設定します。

- ・沢は、総合的な力量が必要なので、遡行 (登坂、登渉、雪溪処理、地形を讀んでのルートファインディング等)、ビバーク (タープ・ツェルト、焚火、食糧調達等)、リスクへの対応など、学習と技術習得の機会など、検討が必要でした。

→月ごとに、必要な学習も行って、山行に備えるとともに、対象の山域の検討をしっかりと行うことが大切です。

→岩ネットや女性部のビバーク訓練、救助対策部の遭対訓練に参加していただいたほうがよいと思います。

「安全な沢山行の実践と普及を行う。」

○山行の取り組みを知らせる、交流することができたか。

・県のHPで、計画をお知らせし、県のニュースに乗せていただいたのと、facebook「沢ネット」に掲載しました。

→県内の参加団体で、どのような希望を持った方がいらっしゃるのか、また、どんな山行をされているのかわかりませんので、県内の状況が把握できるアンケートを実施したいと思います。

→また、沢ネットの山行報告だけでなく、県内の沢山行の様子が交流できるようにできると、よいのではないかとおもっています。

○今年の山行を振り返って、来年の山行の相談する機会を検討しています。

4. 山行報告

<奥多摩・丹波川本流>沢ネット始動開始

メンバー：太田、井上、渡邊、水谷、日高、近藤、鈴木7名

ルート：三条新橋～丹波川本流

期日：2014年7月20日（日）

日程：7/19(土)21:30 道の駅BP

7/20(日)8:00BP～8:15/8:45 三条新橋（おいらん淵に車2台をデポ）～10:00 手取淵～10:40 手取淵出口の広場で小休止～11:35 雨の為遡行中止国道に上がる～車回収-のめこいの湯-帰崎

沢ネットが再開し、初めての企画である。大宮労山元会長兼埼玉労山の副理事長の徳さんが2010年に始めたが、去年は休止していた。今回、その沢ネットを受け継いで再開した。といっても、昨年までの内容はほとんどわからず、どんな企画・運営をして良いかわからないままのスタートである。6月から月1回のペースで実施する予定だったが、準備が追いつかず7月からのスタートとなった。埼玉労山のHPで参加者を募集し7月9日（水）に打ち合わせを行う。だが、埼玉労山のHPに掲載されただけなので、だれが来るのか、全く見当がつかなかった。事前に問い合わせがあったのが13名。打ち合わせ当日は、理事で山ネットを担当している水谷さんも参加して頂き、三郷山の会の渡邊さんが加わり6名だった。そして、本番、第1回の企画には入れ替わりがありながら7名となった。3連休の中日。梅雨が微妙に明けそうにないという参加しにくい条件である。前日も雨が降り、参加者は実施するのか半信半疑で、問い合わせが来た。予報をみると午前中かなんとか持ちそうなので、最悪、奥多摩の海沢川に転進を想定しながら、現地での判断にした。

7月19日(土)渡邊さんはすでに大菩薩をいいペースで歩いてアップをして早々と現地入りである。太田さんも、私が出発する頃には道の駅に着いていたようだ。井上さんと水谷さんも準備万端で待っていてくれた。私と日高さんが到着し、ようやくメンバーの顔合わせとなった。さらに、近藤さんが福島から埼玉入りして、当日の早朝バイクを飛ばしてかけつけ7名全員が揃った。集合場所は、三条新橋の予定だったが、19日の夜は雨の予報であり、水量や20日の天気によっては転進もあり得るので、道の駅泊まりにしたのだ。屋根のあるトイレ前で銀マットを広げ、自己紹介をしながら入山兼沢ネット再開の祝いを行って盛り上がった。

7月20日（日）明るくなると、対岸の低い山に白い雲が煙のように漂いながら、雨上がりの青々とした樹林帯に浮かび上がっていた。薄い曇を通して朝日が明るく丹波の村を照らし、水が濁ることもなく、増水もない。朝食は肉うどんを作り腹ごしらえができたころに近藤さんが到着をした。4台の車と1台のバイクで、予定どおり三条新橋に出発である。三条新橋とおいらん淵に車2台ずつをデポして沢に足を入れた。トップはやりたい人を募り、まずは渡邊さんがリードをすることになった。歩くところはどこでもよい。後続も必ず跡をつけて行かなければならないということはない。困った時には相談で交代していくなどを確認して出発をした。事前打ち合わせで、スクラム徒渉などの徒渉訓練を伝えていたこともあり、途中で日高さんと水谷さんが2人の円陣徒渉を試していた。左岸をへつり泳ぎながら右岸に渡る。足が届かない徒渉が初めてという人もあり、緊張感した面持ちながら、新たな感覚を楽しんで岩に捕まり徒渉をしていく。首まで体が浸かっていると寒さで体中に力が入る。

日高さんが右岸から釜をへつって落ち口に出ようとするが、水流で押し戻され、なかなか落ち口に進めない。やっと落ち口近くに行けたものの這い上がれず、引き返そうとするが、今度は逆方向の流れに押し戻されてしばらく立ち往生し、やっと抜け出した。そのおかげでかなり体は冷えてしまったようだ。ウェットを着ている太田さんと私は寒いながらもだんだん慣れていき余裕がある。途中でトップが入れ替わりながら進む。白波立つ中を浸かってへつり足が立たないところで岩の上になかなか這い上がれずに苦勞する。お助けスリングも出してどうにか岩の上へ上がった。いよいよ核心の手取淵である。狭くなった廊下に白波が立ち押し流されたらどうなるのだろうかと思わせる。左岸をへつっていくのだが、冷えた体に緊張感で力が入る。日高さんがトップをいくが、動きが固い。へつりながら渋滞である。近藤さんは、へつる自信がなく、国道に出た。自信がないときはそれでいいのである。日高さんが、いよいよスリングが下がる出口に届いたがついに力がつき、白波に流された。水中から水面が見えたときにはダメかと思ったという。続く人たちも、次々に滑って振り出しに戻る。さすがに、2回目といのはつらく、巻いて越えてきた。私と太田さんがなんとか抜けることができた。その先に河原があり休憩をした。テルモスのお湯を飲むと暖かいが、寒さを感じるようになり、水に入りたくなさそうな足取りになる。しばらくすると、雨が降り出し、再び河原に出たところで大粒の雨になってきた。しかたなく、ここで山行は終了にし、国道に上がった。雨の中をデポしたおいらん淵まで歩くと、近藤さんが待っていた。最後まで歩けなかったのは残念だったが、とりあえず、第1回目の山行が実施できたことだけでも成功と言える。近藤さんは、みんなに別れを告げ、バイクを走らせて埼玉、そして福島へ帰っていた。6名は濡れたまま三条大橋に戻り、着替えてのめこいの湯で体を温め、帰路についた。

今回、初めてのメンバーと丹波川本流の沢に挑戦したが、私としては良かったと思っている。足の届かない水量を体験し、水流の見方や対処、自分の力量と判断力、それぞれが緊張感を持って今後の課題等を知る期待となったのではないだろうか。私も、沢ネットの運営についていくつかの課題がわかった。しかし、どのように運営していったらよいかは、まだまだ未知数であるが。

今回の山行で言えることは、良きメンバーだということである。真剣に沢と向かい合って、楽しめる人たちであるということだ。ひとつ一つの経験を積み重ねて、程よい緊張感と達成感を味わえるようにしていきたい。

記：スーさん

- ・大阪で沢登りをしていて前日に大雨が降ると中止になったので、今回家から前泊場所までの道中の大雨を見て中止と思い途中で鈴木さんに電話確認したところ、中止の「ち」の字も出ず腹が据わりました。
- ・事前説明会で水温（18度）まで詳細に教えて頂いたので、流石に暑がりの小生もウェットスーツを準備し、本日は快適でした。有難うございました。
- ・流れを読む（速い場所を避ける）ことの重要性を感じました。
- ・泳ぎ系の沢で常に感じるのですが、水中から上陸する場所（足の乗せ場）が中々分からないと非常に焦って何度も滑り落ちます。今回も同じでした。
- ・鈴木さんから聞いた「クライミングの幾つかのグレードの間（例えば10dと11a、12bと12cの間など）に大きなハードルがあり、これを越えるためには自分のクライミングをゼロベースで再構築する必要がある」という話に、いたく感銘を受けました。
- ・沢と関係無いですが、前泊集合場所の1時間前に通過した商店が最後の商店で、集合場所近辺には何も無く若干焦りました。丹波村役場の近くに1軒開いていて用が足りました。

記：太田

レベルアップして、リベンジしたいです。

記：渡邊

ウェットスーツを購入しました。これをもう一度トライしてきます。

記：日高

3度の泳ぎの都度震えました。足が浮いて地に着きませんでした。

記：水谷

足の立たない沢を初めて経験しました。

記：井上

次の週も別の沢の計画を立ててトライしているのは、近藤さんです。



<奥秩父：鶏冠谷左俣>

楽しかった、苦しかった、あきらめなかった鶏冠谷左俣

1. 参加者 5名 太田、井上、水谷、高橋、鈴木
2. 鶏冠谷左俣の遡行タイム

2014年8月30日(日) 前夜泊 鶏冠谷左俣—鶏冠尾根下降...

05:50 出発-06:20 入渓-06:37 鶏冠谷出合-06:50 魚止ノ滝-07:50 2段5mの滝 -08:05 逆「く」の字-08:50 二俣-09:10 12mの滝-09:35 スライダー状 10m-10:35 3段 15m 大滝-11:45 水が枯れ靴に履き替え-13:10 尾根-14:30 とさか山山頂-15:00 別れ道、迂回路へ-道迷い-18:00 登山発見-19:35 東沢出合-20:25 駐車場

3. 鶏冠谷左俣で得たこと

① 滝の登坂とその技術について

- ・登れる滝が多く巻き道もしっかりあるので楽しんで登れると思う
- ・滝を登るときのルート取りがうまくできない。下から見えるホールドやスタンスの間隔を自分の身体のサイズに投影できないので、とりあえず取り付いて手探り足探りで登っている感じ。
- ・登れる滝、巻かなければならない滝の判断もまだ甘い。
- ・ミクロ的(細かい観点)には、「水を浴びまくった滝」が冷たくて何度もトライしては戻りを繰り返していたが、目近に滝の中を見続けていたら、流水や飛沫の変化からホールドが見えてきたのが経験知となった。

② 詰め上がりのルート読み

- ・詰め近くに近づいて増えてくる分岐の選び方が難しい。読図力+ α が必要か。
- ・靴履替後は、地形的にも当初のイメージ(四ノ沢を越えてから藪漕ぎ)を修正出来ず、ガシ場を「彷徨」した。

③ 下山；鶏冠尾根について

- ・3岩峰下での地図確認をていねいに。

⇒ 方角的には合っていたが、もっと早く登山道に出られたのでは。と考えましたが、帰りは歩けるのかと心配でしたが、そんなに不安はありませんでした。

- ・残置ロープのところでもう少し辛抱して道を探せなかったことが悔やまれる
- ・第3岩峰出会 15時（必要下山標高 1,000m）以降、「ピバーグ→下界への連絡・対応」懸念は経時的に強化され、樹林帯を「彷徨」した。
- ・トラバース・登山道の歩行能力の不足を感じた。

④ 全体を通して

- ・地図読みが大切。地図全体的を読み込むこと。
- ・もっと声を掛け合いみんなで確認し合う事が、不安や間違いを減少させる
- ・マクロ的（大きな観点）には、（特に靴履替後）全体観（スケジュール・地形など山行全体）を持たず（喪失）、「彷徨（他力本願、付和雷同、視野狭窄、此処は何処？私は誰？）」した。
- ・当初持っていたスケジュールイメージは、「11-12時に登攀終了・約4時間で鶏冠尾根下山」というものであったが、靴履替時に12時であった時点で現実的イメージ修正が出来ず、以降「ピバーグ→下界への連絡・対応」で頭の中が一杯になり、山行全体の中での現状把握と先のイメージ修正をする余裕喪失した。
- ・先のイメージが描ける（下山道に出てからは、夜道なのに嘘の様に元気が出た）のと、描けない（先に光の見えないトンネル。精神的に非常にキツイ）のでは大違いであった。
- ・体力の不足と遡行能力で、尾根道まで突き上げるのに時間がかかり過ぎた。

4. 鶏冠谷左俣の特徴とこの沢を登るために必要な力とは。

① 滝の登坂とその技術について

滝の登坂については、ホールドを確かめながら、「登る」ことを楽しめていたと思います。下山に時間がかかったので、遡行全体の時間配分からすると、一つひとつの小滝突破に掛かった時間がきになってきますが、滝の登坂を楽しみ、技術を向上させるのにはよかったと思います。

② 詰め上がり

四ノ沢出合以降は、すぐに現れた二俣を左の沢を詰めると、まもなく最近のガレ場に出ました。今年の豪雪の影響でしょうか？土砂崩れの左脇を登ると、苔むした水形がほぼ稜線まで詰め上がっていました。源頭でのルート選びは、山の地形を読んでいることが大切です。感動的な藪漕ぎを覚悟しておくことは必要だと思います。GPSがあればかなり有効でしょうが、地図読みの醍醐味を味わうことが減ってしまう？……

③ 下降点の確認が一番の課題

第3岩峰から下に、「出合」の看板があり、新しいロープがフィックスされていました。鶏冠尾根がかなり整備されていて驚きましたが、その先のルートを確認できず下って登山道を探したことが、時間的なロスになりました。わかりにくいことを前提にルートを選んだのですが、第3岩峰下で見つからなかったときの対応が不十分でした。再度、手分けをしてルートの搜索をすべきでした。また、下降のルート取りも、もっと検討をして、どのように探すのかを確認すべきでした。それが、メンバーの見通しが持てなくて、精神的・体力的消耗、足取りを遅らせることになりました。

④ 冠谷左俣を登るのに必要な力とは。

- ・12時間以上歩ける体力と、ある程度の登坂技術、基本的なザイルワーク。
- ・地図を読み、山の全体把握をし、現在地点を確認できること。

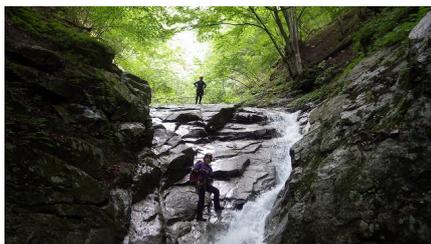
- ・ピバークやケガ等に不測の事態を考えて対応できる知識と技術、そしてそのことを予測して行動修正でること。
- ・山域を把握し、沢から山に迫る醍醐味を楽しめる心。

⑤ 必要な道具、使った物、（持って行った物）

- ・登坂具；ザイル8mm×30m、10mテープ、スリング、（バイルとハーケン）等
- ・（ピバークに対応する物；ツェルト、ガスとバーナーヘッド・コッフル）

5. その他

- ・みとみの道の駅は風が通って寒い。
- ・日帰りだと、帰りの運転がしんどい。
- ・道に迷ったり、追いつめられたときには、周りの写真を撮ると、客観的になれる。



<越後・巻機山周辺；米子沢—奥利根周辺>

奥利根に足を下ろして

メンバー；井上、太田、高橋、野田、竹井、中川、鈴木7名

ルート；米子沢～上ゴトウジ沢～上トトンボ沢

期日；2014年9月13日（土）～15日（月）前夜発

日程；9/12(金)22:30 道の駅南魚沼BP

9/13(土)5:00BP—6:20 桜木駐車場～13:30 稜線～14:15 30m 滝（懸垂）～16:30 1210m付近 BP

9/14(日)8:00BP～9:15 2段 15m

滝（懸垂）～9:50 ブサの浦沢出合～11:30 スタレ状 20m 滝（懸垂）～12:50 トトンボ沢出合 BP

9/15(月)6:10BP～6:50 上トトンボ沢出合～7:30 尾根越えの枝沢らしき地点～8:35 15m 滝（ザイル）～10:30m 大滝 25m～11:20 最後の二俣～11:55 藪突入 ～ 12:50 稜線 14:25 牛ヶ岳木道～17:30 桜木駐車場-六日町“湯らり”一帰埼

今回の沢に何人参加できるだろうか、と思いながら最終的には7名になった。当初は佐梨川の大チョーナ沢を予定していたが、かなりハードになるので、奥利根潜入に変更をした。関東の水源となる奥利根は埼玉からすれば距離的に近いが、奥利根湖に阻まれてアプローチが遠い沢である奥深いのが魅力である。お金を出してボートを利用すれば手ごろで、釣り屋さんが多いわけなのだが、ケチな沢屋は自分の足で稼ぎたいというところだ。自分の足で歩いてみたいわけだ。天気は、太平洋側と日本海側は谷川の分水嶺で逆転している。週末の越後は晴れ予報で回復傾向にあるが、前線の動きが微妙である。しかし、不安定なはずの越後の夜空に星が輝いていた。

9月13日(土)おにぎりをくわえながら荷物の準備をし、清水の集落に向かう。駐車場にはバスも入っているにぎわいの様子を見せているが、我々は登山道の対岸の道を登っている。米子沢の脇にはもう1本の沢があり、林道も伸びていて間違いそうになる。堰堤工事のための林道を登って行くと「米子沢」という案内表示があり、いかにも人気な沢である。人気がある沢ということで敬遠しながら、結局何回も登っているのだが、今回は数年

前の大雨で崩壊し埋まっているという状況も気になっていた。ゴーストで埋まりかけている堰堤を越えてしばらくいくとナメが現れ、川海苔が流れに揺らめいている。そして3段40m滝につくと、左岸が大きく崩壊し、滝の下部がガシで埋まっており、滝は右から楽に登れるようになっていた。井上さんは自前のわらじでフリクションを効かせて快適そうであり、今回リーダーの高橋さんはアクアに物を言わせながらも、ちょっと黒くなって滑る岩を避けながら野田さんとぐんぐん登って行く。竹井君も安全第一と言いながら、登り始めるとエンジンがかかり、体は止まっていない。食担で重い荷物に埋没している太田さんはマイペースながら、カメラの記録はバッチリである。幸せいっぱいの中川君も酒がたっぷり入ったザックにあえぎながら満面の笑顔が光っている。快適な滝を楽しみながら、草原に囲まれた上流部の大ナメに出ると、巻機に來たことを実感する。避難小屋への分岐を確認し1本手前の沢に入るため尾根を越えて稜線に出る。深い笹から顔を出して奥根を望み、心が弾む。時間的に幕場に到達できるか心配だったので、リーダーは一応、小屋泊まりにするかをみんなに聞いた。しかし、リーダーの奥まで行きたいと逸る思いに、小屋泊まりの選択を声にする勇氣を持った者はだれもいなかった。

稜線から笹のトンネルとなっているルンゼを下っていく。途中、30mザイルいっぱいの懸垂をし、上ゴトウシ沢が見えてくる。沢は稜線沿いに下って左に大きく曲がって行くところで狭くなっているのがわかる。その手前に、幕場になりそうな河原が見えた。先行するリーダーはトボを信用して先に進む。結局、土小崩れ後の荒れ地に幕を張ることになったが、生地もできず、各自が適当な場所を選んで寝ることになった。流木は湿っていたが、そこは経験を重ねてきている中川君の腕でしっかり火が起きた。それぞれが持ち寄った酒は2日間で飲み乾せる量ではなかったが、利根に身を委ねて焚火を囲み濡れた体を温めるには最高の御馳走である。そして、食担の太田さんが準備してくれた夕食は、トマト煮である。生の野菜やベーコンを2回に分けて煮込んで食べた。焚火に掛けるのが初めてという1さんのピリー缶はすっかり黒くなり、焚火の炎に照らされていた。腹も落ち着いたところで、タープの下に移動し、デコボコとした地形の間に体が収まるところを探して横になった。中川君と私は焚火の傍でごろ寝をした。焚火世話をしながら脇に横になるというのは、なんとも気持ちよいものである。

9月14日(日)朝から青空が広がり、気持ちの良い朝である。草原状の谷間に煙りが立ち上り、奥根にわれわれの存在を示しているようでもあり、谷が静かにを歓迎してくれているようでもある。とりあえず、今晚の幕場である上トトンボ出合いを目指して出発だ。2段15mの滝では残地の懸垂支点到に惑わされて、滝の中をシャワー懸垂になるところだった。と言いながら、下降地点を確認して支点を設置したものの、最後はシャワーになり大笑いである。ブサの浦沢出合い付近で、上トトンボ沢へ尾根を越えて行くはずだったが、向かいの尾根が高く、GPSではもっと下降付近ということで下って行った。しかし、上トトンボ沢は25000呎に水色の水線が描かれておらず、尾根を越えるポイントを見落として下トトンボ沢を目指していた。魚止めの滝の手前で尾根を越えようとしたが、ルートを確認できずに下降していくことにした。魚止めの滝は見た目が難しそうなのもの、確保をしてもらいながらクライムダウンができた。その先のゴルジュを楽しみながら下って行き、広い河原になると幕場に適したところが点在していた。出合いの下には最高の幕場が用意されており、言うことなしである。さっそくタープを張り、焚火を起し、それぞれに岩魚を求めて散っていった。私は、途中でイナゴを見つけられず、トンボも飛んでいなかったの、川虫を探したがみつからず、意気消沈。まあ、みんなの釣果を期待して、竹井君、中川君とのんびりしていた。だが、幕場に最適であるこの付近は釣り屋も多いようで、小ぶりのサイズがたくさんいるもののよい型の岩魚に会うことはなかった。それぞれ下げてきた岩魚をぶつ切りにして、1尾はソーメンの出し用にし、他は唐揚げでいただくことにした。夕食はモツ煮である。準備の時間もなかったのだが、時間的に余裕があると思い材料を持って現地での調理とした。モツを煮込み野菜とこんにゃくを入れて作った。実は、中川君・竹井君と赤谷本谷にモツをつくって味噌でかため持って行ったことがあったが、温めて食べようとしたところで鍋をひっくり返し食べられなかったことがあったので、ぜひ食べさせたいということもあったのだ。もちろん、酒がすすんだことは言うまでもない。竹井君が嬉しそうに家族や子どもたちがかわいいと話している様子に、私も嬉しくなった。また、野田さんの北海道の沢の様子に魅了され、来年の夏は北海道の沢にしようと盛り上がった。

9月15日(月)ブサの浦沢を下降してしまったこともあり、帰りは早く方がいいのかなということ、上トトンボ沢を遡行することにした。上トトンボ沢は藪っぽく、脇から伸びている枝を払いながら進んで行く。途中で苔蒸した枝沢が右岸から入っていて、そこがブサの浦沢へ乗っ越し支点だったようである。今思えば、乗っ越して牛ヶ岳に戻ればよかったかもしれないと感じた。上トトンボ沢は15m滝でザイルを出し、最後にスラブ滝があり、アクアステルスの威力を見せ付けられた。最後は笹藪に入り、牛ヶ岳まで重い足を上げていき、ピーク直下が色好き始めた草紅葉の中に飛び出した。巻機山に伸びる木道に座りながら奥利根を見渡し、帰ってきたことを実感した。今回は、高橋さんのリーダーをすることで戸惑いもあったが、沢遡行のおもしろさと難しさを経験ことができたのではないと思う。また、野田さんの的確なリーダーのサポートやメンバーへのアドバイス、配慮、苦しい藪漕ぎを笑いで導いてくれてその体力に脱帽である。私にとっても良い勉強となり、充実した山行だった。

記：スーさん

大雑把にいえば、成功だったと思っています。

泊りの荷物を背負うという事がどんなに遡行に影響するか、身を持って実感できたし、その上で予定の沢は無理と判断でき、転身できた。(日没前に下山も出来た！)

地図読みは、資料に頼り過ぎてしまったが(しかも間違った資料。。)GPSも使いだんだん上手くなってきていると思う。

(最後はGPSに頼りっぱなしでしたが、、)

幕場では各々分担したので、どこまで学べたかはわかりませんが、私はタープを張るイメージができるようになったと思う。別のバージョンになったら出来るかわかりませんが。。

一番はザイルワークだったと思う

ピレー・支点の取り方・ランニングピレー・ブルージック・8字結び・・・等

どこまで理解しているか確認しておくべきだった。

今回はその場で教えてくれる人がいたし、声が届くくらいの位置だったのでよかったが、もし、、

今後の課題だと思います

でも全体を通して、楽しく重い想いをして楽しめたと思います。 記：高橋

・米子沢も奥利根側も明るく開けた溪相で気持ちよかった。ただし18キロを背負っての滝の登攀は初めてだったのでやや怖かった。

・メンバー各人がとてもユニークで3日間とても楽しかった。しんどいときも常に誰かが冗談を言っていると頑張れる。

・最終日、上トトンボへの転進は正解だった。先人の遡行記録は大変有用ではあるが、自分たちのパーティーの人数・装備等を考慮して遡行時間などを計算し直すことは重要。

・やはり沢の地形は難しい。2日目の午後、下トトンボと思い込み私が釣竿を持って入っていった沢は何だったのだろうか？ 帰宅後、地形図を見直してもいまひとつ釈然としない。

・背丈ほどの藪漕ぎにGPSは強力なツールだが、藪に突入する前、見透しが効くうちに地図で全体像を把握しておくことも大事。

・藪漕ぎ中、交代してトップに行かなければと思ったのだが、ついて行くのがやっとだった。体力不足を痛感。

・幕場の設営については全体の流れをイメージできないので自分からなかなか動けなかった。場数を踏むしかないですね。

・枝からの懸垂支点の取り方など、まだまだ学ばなければならないロープワークが沢山あることを再認識。

・ワラジの思わぬ長所発見。履きつづいたら焚火で燃やせる。

記：彩の山友会・井上達夫

自分的には人生初沢泊・沢泊荷物を担いでの初遡行・初焚火・沢泊での初釣り・初藪漕ぎと、「初」連発の中、皆様の御支援で無事に下山出来たことを、大いに感謝しております。改めて有難うございました。

- ・沢泊装備を背負っての登り（藪漕ぎ含む）が厳しかった。体力的・精神的に登攀・下降だけで一杯になり、先の事や他の事まで気が回らなくなる（焦って記憶力・判断力・暗算力など、頭の回転が落ちる）。
- ・今まで漠然と考えていた確保技術・生活技術などが実感出来た（帰りの車中で井上さんと、今回沢行を「沢登りの集大成」「沢登り大全」などと表現して居ました） 記；太田

<気がついたこと>

○駐車場からのアプローチ

- ・入渓点を確認するのは、意外と核心だったりする。アプローチで隣の沢の脇の林道に行こうとしたが、米子沢の脇にはもう1本沢が入っていて、左岸の林道からの入渓がよいのだが、となりの沢に入りそうになった。沢は下流で合流しても、上流で合流することはないので、沢を渡って登山道を登ることはない。沢を渡り直すことがあればよいが。

○米子沢から上ゴトウジ沢へ

- ・米子沢を詰めていくと、避難小屋と巻機山へ分岐となり、巻機山へはロープが張ってある。その手前の右から入っている沢を登るのだが、その分岐を確認してから乗っ越しの沢に移動した。その際にはGPSで尾根を越えていくことが早いと確認をした。
- ・沢から離れて尾根に上がるときには、水を確保しておくことは大切である。稜線で停滞となった場合に水は貴重になる。
- ・乗っ越しの稜線にでたときに、尾根は胸までの笹藪であり、下降点の窪地から笹のトンネルとなっていた。下降点は、全員で確認して行動することが大切である。

○上ゴトウジ沢下降（特に沢の下降）

- ・利根川水系に入り、下れば逃げられるということはないので、滝の懸垂下降をしたときには、万が一の場合を考えて、戻れるのかということは意識しておきたい。
- ・二段滝のときに残地のスリングにザイルをかけて下降しようとしたが、滝の中に入るところだった。残地を信用してはいけない。必ず自分でルートを確認することが大切。
- ・滝の懸垂下降で大切なことは、下降地点の確認とザイルの長さが足りるのか、下降点の支点（滝の釜に入らないように）の位置と設置の仕方（フリクションノット：クレムハイストで返しが上になるようにする）、ザイルが下まで伸びて行くように投げる、2本のザイルを結んだときには結び目を考えてどちらのザイルを引いて回収するかを声を出して確認する、バックアップをとって正しくセットされ制動が効いているかの確認をしてから懸垂を開始する。トップが沢床に下りられたらザイルを動かして回収できるか確認する。

○幕場を探すのは重要

- ・13日稜線を越えたのが遅れて、よい幕場にたどりつくか心配だった。途中、河原で広いところがあったが、パスして、沢が左に曲がるころの高台に土砂崩れ跡があり幕場にした。
- ・幕場としては、雨の心配があるときには、落石がない高台が妥当だ。ゴルジュに入っては安全に寝るところなどあるわけではない。しかし残念ながら、土砂崩れの後、笹の根が出ていて生地が難しく、いい幕場とは言えなかった。
- ・14日の幕場となった本谷と上トトンボ沢の出合いは、幕場適地があちこちにあり、砂地の高台が最高の幕場となった。小石を覗いてイタドリなどの草を刈り取って砂の上に引きつめて銀マットを引けば言うことなしだ。
- ・タープを張るには、立木があれば利用するが、棒を立ててザイルで張れるので覚えておくことだ。寒い場合や雨の時は、タープの下にツェルトを張ればテント状態になる。タープの張り方には天気や気温によっていろいろ

バージョンがある。また、少しでも坂になっていると寝ているときに低い方に移動してしまうので寝方に注意すべきだ。

・焚火の起し方と利用は多彩だ。燃料としても、暖を確保するにも炎をみているだけでもほっとできる貴重な存在である。

○ルートファインディング

・上ゴトウジ沢から本谷を越え上トトンボ沢に入るルートが見つからなかった。上トトンボ沢が藪沢であり、25000 図に水線で描かれていなかったの見落とし。本谷を下り途中の藪に入ろうとしたが、ルートが不確かだった。この地点は、全体のルートとしても重要な地点なので、全員で入渓以前に 25000 図で確認すべきだった。トポだけの判断は危険であり、偵察してからだったと思える。実際には、場所がちがっていたので突入せずによかった。

・上トトンボ沢と下トトンボ沢の分岐の確認は、下トトンボ沢を登って沢の状況を把握して確認して下トトンボ沢であることを確認した。ルートを確認するには「偵察」というのを惜しんではいけない。もちろん、高巻きの場合も。

・最後の二俣を右に入ってちょっと藪漕ぎが多くなったかな。最後のルート選びというのはむずかしい。地形をよく読んで判断をするのだが、これは地形図の読み、GPSの利用、感を効かせることだが、いいルートが選べると喜びは最高である。

○「一寸先は藪」「『若いうちの苦労は買ってでもしろ』なんていない」なんていいながら、苦を笑いで飛ばせ。

・藪の中でもがいていると、いったいつ出られるのか、稜線につくのか、私は何でこんなところにいるんだろうと思ってしまう。わざわざ面倒なことをしに来て・・・藪で、もがくのはつらいな・・・歩いていけば、いつかは着く。歩かない限り、稜線には届かないよ。そうやって、体を持ち上げるかがいつのまにか病みつぎになってしまうからあやしい。

○その他

・沢で体を濡らせて稜線に出るとかなり冷やされてしまうので、カッパを着るなど、体温を維持することは大切である。

・藪漕ぎなどをしても汗が出ないのはシャリばて！食料補給が必要だ。そのままだと、低体温症になってしまう。

・荷物の量は、自分の背負える重さを考えて精選すべきだ。酒が切れてはある気にもならなくなる。持てるだけ持っていこう。歩けなっては捨てるしかなくなるよ。食材の量も同様だ。厳しい沢では、食料も制限される。ご飯は、焚火で炊くのが一番。

記；スーさん

